



2021年11月29日放送

「第120回日本皮膚科学会総会 ①

総会を終えて」

自治医科大学 皮膚科
教授 大槻 マミ太郎

初のハイブリッド形式で行われた総会

2021年6月10日より4日間、第120回日本皮膚科学会総会を、パシフィコ横浜の現地およびリモートのハイブリッドにて開催いたしました。コロナ禍から脱却することができない中、皮膚科学会として初の完全WEB開催となった昨年と異なり、今年はハイブリッド形式ということで、こちらも初の試みでした。しかし、学会会場の感染対策に万全の配慮を行い、結果として大きなトラブルもなく、無事終了できたことに安堵するとともに、全国から参加された皮膚科医ならびに関係者の皆様に感謝申し上げます。われわれとしてはベストを尽くすも、会員の皆様にはご不便をおかけしたことと思いますが、初めて経験する開催方式という事情もあり、至らぬ点をご容赦いただければ幸いです。

本総会のテーマは「Dermatologic, Dermatropic, Dermatrophic」で、2つの造語を使って「デルマ三段活用」と銘打ち、皮膚科を発展させたいという目論みを表現しました。学会ロゴは、スパイク

第120回 The 120th Annual Meeting of the Japanese Dermatological Association
日本皮膚科学会総会

会期 2021年6月10日(木)~13日(日) 会頭 大槻 マミ太郎
会場 パシフィコ横浜 (神奈川県横浜市西区みなとみらい1-1-1) [自治医科大学皮膚科学講座 教授]

Dermatologic
Dermatropic
Dermatrophic

主催 前川 武雄 (自治医科大学皮膚科学講座 准教授)
共催 自治医科大学皮膚科学講座
〒329-0498 栃木県下野市黒崎町3311-1

協賛 公益社団法人日本皮膚科学会内
大会運営部 運営チーム
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-4
TEL: 03-3811-5079 FAX: 03-3812-6790

E-mail: jda2021@dermatol.or.jp URL: <https://jda120.jp/>

をもった新型コロナウイルスを、宇都宮餃子で封じ込めたイメージ、またマスコットキャラの三匹の猿は、2013年に開催した東部支部学会の日光三猿ロゴを踏襲したもので、1匹は液体窒素をもってコロナ封じ込めに向かうイメージで、こちらも「三猿活用」というオチがついております。

さて、昨年に続き今年も欧米からのリアル参加は困難な状況で、時差さえクリアできれば、リモートでライブという選択肢もあるのですが、今回はいわば純国産的なプログラムに粋を尽くしました。11個を数える会頭特別企画はすべて、純国産にかける会頭の心意気を反映しています。また、会頭特別企画に加え、教育講演も会頭が直接介入して積み上げたため、計62セッションとなりました。今年の土肥記念国際交換講座は、トレド大学およびテキサス大学の教授を歴任されたAkira Takashima先生で、結局リモートとなりましたが、生粋の日本人への授与は60回を超える歴史の中で初めてでした。



いただいた演題数は、一般演題389題（口演80、ポスター309）、Oral Presentation in English 79題（口演48、ポスター31）でした。

参加者に関しては、完全WEB開催に切り替わった前回（5,900名超）を上回る、6,794名の方にご登録いただきました。現地参加は約1,500名であり、久しぶりに挨拶が叶った人達の間では、小声の会話ながら、マスクの上からでも分かる笑顔が印象的でした。現地・リモート合わせて2,000名を超える聴講があったのは、唯一3,000名超を数えた会頭特別3のCOVID-19セッション、そして会頭特別7の皮膚科レジェンド・アーカイブ、特別教育講演2の今山病理学、そして会頭講演の4つでした。一般教育講演は例年同様、医療安全・感染対策、医療制度、食物アレルギー、薬疹に加え、今年は湿疹皮膚炎、正確には「湿疹皮膚炎の再考」ですが、これらがベスト5で、どの会場も満遍なくそれなりに“静かな盛況”であり、極端に参加人数の少ない会場はまれでした。

会長特別企画

さて、ここからは会長特別企画のエッセンスについて、順を追って紹介したいと思います。

まず、特別企画1『Dermatropic/trophic 他科領域と繋がる皮膚科研究』、2『Epidermotropic 皮膚病理』は、いずれも、皮膚科に様々なベクトルを向かわせる、そして結果的に皮膚科を発展させたい、というテーマをタイトルに含んだ企画です。企画2にあるepidermotropismは、皮膚科専門医の知識とし



て不可欠な病理用語ですが、この表皮向性たらしめる原動力は何なのかを探るもので、初日の夜という時間帯にもかかわらず、1700名超の参加者があり、嬉しい限りでした。

特別企画3『COVID-19 パンデミック1年を経て：有識者が語る』は、プログラムでそれに引き続く形で設けた『COVID-19 緊急提言』とともに、新型コロナウイルス関連の企画で、緊急提言は注目のイベルメクチンのエビデンスに関するものでした。

特別企画4『皮膚センサーのヘルスケアと医療への応用』は、東京大学工学部長の染谷隆夫先生に、前年度の総会に引き続き、ウェアラブルの最新的话题をご提供いただきました。

特別企画5『AIが切り拓く未来の医療』は、他科領域から新進気鋭の3名の演者を選び、皮膚疾患層別化・予測も含めた今後のAI医科学研究の展望、そして内視鏡領域、精神科領域から最先端のお話をいただきました。

特別企画6『宇宙医学と加齢医学の接点』では、東京大学の外科医からJAXAの宇宙飛行士へ大転身された古川 聡先生と、腎臓病学を通して最先端の加齢医学研究に取り組む自治医大教授の黒尾 誠先生のペアリングで、宇宙医学と加齢医学のセッションを設け、夢が膨らむ化学反応が皆さんに伝わったことと思います。

特別企画7『皮膚科レジェンドのアーカイブ掘り出し』では、Visual Dermatologyで教授退任の記念号的性格をもつコレクションシリーズのアーカイブから、5名のレジェンドの先生から忘れ得ぬ厳選症例をご提示いただき、その振り返りとともに皆さんの学びの場とすることができました。

ゲノム関連の2つ、特別企画8『遺伝統計学による皮膚科疾患の病態解明への試み』は、遺伝統計学の権威、大阪大学教授の岡田随象先生からヒトゲノム・オミクス解析の最新技術やトピックを、そして会頭特別企画9『広がるゲノム編集のターゲット』は、構造生物学の権威である東京大学教授の濡木 理先生から、近年注力されているCRISPR-Casに関連するプロジェクト、ゲノム編集創薬ベンチャーの話をお聞きすることができました。

特別企画10『生命を捉えなおす—動的平衡の視点から』では、『生物と無生物のあいだ』の著者である生物学者、青山学院大学教授の福岡伸一先生から、コロナ禍の渦中にある我々に、ウイルスについての重要な気づきを与えてくれました。

特別企画11『好発部位の謎に迫る』は、私自身ずっと取り組みたいと思っていた、皮膚疾患によって特定の部位に好発したり回避したりする理由、皮疹分布の謎についての疑問を解決すべく、身体部位別に掘り下げる企画を設けました。謎を解くことは難しいですが、皆さんの知識欲をくすぐることができたかと確信しております。



その他の充実した企画

さて、ここからは会頭特別企画以外に移ります。

「語らざる会頭講演」と題して自分に課したミッションでは、スライド映像とピアノ演奏のみによるメッセージとヒーリングを目指し、大学および医局スタッフの自己紹介とともに、東日本大震災や物故教授等を追悼する曲も弾き、多くの方から感動、感謝のお言葉をいただきました。2013年の東部支部学会の会頭講演を再現するような、涙を誘う場面もありましたが、実は学会場のフロアで合間に流していたのは、その東部支部学会で作成した記念CDから、自作の学会テーマ曲、花は咲く、などでした。

慶應義塾大学から襷を渡されたデルマトオーケストラも、帰ってきました。現地集合でできる限りの演奏ということで、過去に演奏経験のあるシューベルトの第5交響曲を、リモート参加の皆さんにもライブ配信することができました。来年こそ、念願のベートーベン第九フル演奏が実現することを祈るばかりです。

また、文化講演としては、笑点でおなじみの三遊亭円楽師匠に、コロナ禍でも役立つという意味合いを込めて、「笑いある人生」をお願いしました。ご自身ががんを患われ、折からの薬の副作用もあって、痛々しいお姿だったのも事実ですが、今回は特別にWEB視聴も認めていただき、われわれにとって大きな励ましになったことは間違いありません。なお、誰よりも早く学会印象記を執筆いただいた安部正敏先生には、充実した学会プログラムから“学びある人生”、会頭講演のピアノ演奏から“芸術ある人生”、そして円楽師匠の文化講演から“笑いある人生”の三段活用という絶妙なコメントまでいただき、会頭の狙いよりも巧みな総括に私自身感激している次第です。

学会のアンケート調査では、「非常に良かった」46%、「良かった」45%を合わせると、9割の方に高評価をいただきました。過去にないほど膨れ上がった会頭特別企画と教育講演については、多すぎるとのアンケート回答がみられたものの、トピック選択については高評価が86%を占め、低評価は皆無でした。ライブ視聴に使用した機器はPCが約半数を占め、スマートフォン、タブレットの順でした。他の会員からの声としては、参加場所が野外、空港、リゾートホテルなど、WEB視聴に慣れたと思われる多様性も感じられると



ともに、「子供の世話をしながらでも」、さらには「コロナワクチン接種後の副反応で寝ながらでも」視聴できたという、今だからこその回答も目に留まりました。

おわりに

さて、コロナ禍でいつの間にか、学会の標準装備イコール WEB、が New Normal になり変わりつつあります。ただ、アンケート調査でハイブリッド希望が 84.5%であり、WEB のみ希望、13.9%を大きく引き離したこと、また「現地開催オンリーには絶対戻らないでほしい」という意見が目立ったこと、そして何といたっても今回ハイブリッドが実際に成功を収めたことで、今後の形式はハイブリッドが主流になっていくでしょう。実際、今回は会場参加者の 3 倍以上の方がリモートで参加されており、さらに学会終了後も年度内ならいつでも、どこでも、何度でも E ラーニングで学習できるわけで、生涯教育システムはさらに充実した感があります。なお、教育講演が E ラーニングで学会後も視聴可能なことには、90%超が「非常に役立つ」との回答でした。

自治医大のこの小さな医局でコロナ禍の日皮総会を担当し、慶應義塾大学から受け継いだ襷をハイブリッドの形で次に繋ぐことができたのは、皆様のおかげと神の慈悲によるものと受け止めております。国際化を推進してきた総会がハイブリッドでどうなるか、そして懇親会が再開できるのか、これらは今後の課題となりますが、コロナの収束と懇親の場の復活、そして皆様のご健康と皮膚科学会の発展を願うとともに、最後にこのやんちゃな会頭を支え続けてくれた日本皮膚科学会の学会チーム、そして当科事務局長の前川先生、秘書の野澤さんにも心からの礼を述べて、学会紹介を終えたいと思います。